閨秀撥奇俠客傳 第三集

四

開卷驚奇俠客傳 第二卷

東京圖書館

和書門	小說類	二六函	三架	六〇號	二五冊

開巻驚奇俠客傳第三集巻之四

東都　曲亭主人編次

明治十年交換

東京帝國大學圖書之印

第二十七回　縫殿自焼〜〜樓を飛ぶ　安次死を送りて生ふ會ふ

一大形ふ吹らとえい。群大聲ふ相從ふ虚実の間ふ惑ひめく。世ふ言ふ〜〜ぬ習俗ふあるえば。縫殿ふ既ふ彼岸ニ渡報も知せ〜京師の凶変剰里の風聲の這那符節と合せ〜ぎく。疑ふべくもあ〜ぼれが這里へも緝捕使と向られんそ乃折ふ潔く死ぬそとの。膳向ふ心ふ覚期と〜とも言ふ出さるべ沿ぞ知〜ぞ生ふ黄縁る垣衣と。救ん與ふ恁々と誘ふ宝珠院へ央鍼妾ふらるとと〜と垣衣つらくら聞て。是ふ不思議の死ふ〜ま。御厄會ふ寄ふ見ぶ左ふも右ふもちん計ふ遵ふ〜ぶとふ思ふ〜ねど縫刺の技ふ〜ぬ。拙く侍る居。然るを御寺へ参りそも尼御前ふ稱ぶ〜ぶ爭何ふ妙ふと縫殿ふ聞ふ〜ぶ不合晴

がうを事共なれば大槩の舊衣の解洗ひのまゝなれば。やうやう儘一ぱいとあくるを。推薦めて立ちのいそぎに納戸より今出一本なる匣あり。昨夜情を地に准備とあるを。亡君正元夫妻の木主菊水の旗金銀までも藏めしを。傍に措きて後方に居る一箇の衣箱を。又こゝに指示して。南垣衣刀祢這内に夏冬の衣裳箇数あり。ちゝ咸ん身まかりせん小雲時にても他に宿に歌るに便るべのあれば涼に朝暑に日に隨意合なるを被べう。又這匣に要ある東西に復市がかゝる未ぬまで共に御寺へのそなへ。知員禪尼に告ぐ。告稟して預けまゝるべ。又臂近に措べし。這義もかゝるのそなへ。然に氣もそぐ誂で情由に有繫に石倉の媳婦に兵へ後の事逆てを憑む苦しけれを限に復あとに紀念贈りの真愛染衣も包みし。這に四に樹て色に知まど名に。縫殿に引て垣衣に深に情に感涙を拭ひあへぬ。額つゝを過世甚麼に乖障に幸にて流離に今ぬるべ夏の草枕這里に旅宿にけるべ則深に奴家に出てらるとを宜へ御寺へ寓さるべ。ちゝ恩に忘れ御恩に報ずべ。芙に免しのまと推辭に聞ぬ。頭に掉てそなに無に口詛に。這衣箱の内に我少に時被舊に今に要に東西に復市に。あん身の素生に流寓の情由に問へ。がそのまゝ具に知られぬ。絶て又に復市に伴れて來にる人に。徒に偽もあらぬ。駝に遺のそんのそ兵に。そ一に垣衣に沿固辭難にその欲を舒るに殿に然にそと點頭に寫措に書一通に住持并に同伯の比丘尼達へ。戒に施に阿弥陀の御に糸撰に願に白楮線に見布尉に手漆に推へ。折敷に復推裏に單袱に隅金に折返にも餘にあるを屏一夜の物櫛笥鏡臺這那に姙妾毎に借に端近に出に却農僕一両名に喚に。詞急迫に吩咐に身壯衣に垣衣に卒に。華に露に脆に涙に找に人の情に形に身の不樂に立難に垣衣に

殿へ奇物を贈り刺客心地にて泣くこれど生憎は悲しかる瀬なるべし。出送る程に農僕たちは拾取に抗ひ衣箱小包大裏背負載せつ引提げて去向へ右へ左へと聲を掛けつ垣衣の後に跟一走に六道の岐路は孰へ走一走。能化貌吉似而非引接へ地獄の持る如意宝珠女僧院投ていそぎける。按ずるに俳諧師鬼貫が雑雀の發句あり作得て今この條を綴る及びて奉ある感ずる奉魚多夫保三年十二月廿日沒歳享年四十四伊勢松坂寂光山願證寺に葬る法号[illegible]極高道春居士

いとく佳其句ふへつるく。人の親は烏追ひけり雀の子夫俳諧の巴人の短曲絶へ十有七言るれどよくその情を穿つ。かくの如くまれるあり。あるは毘縫殿が必死の覚期。今垣衣と半遣るあるべし似る人の親は鵜を追ふ類なるべし。間話休題。徒而這日の黄昏時候。垣衣と送くる農僕たちは縫殿が身邊を赴いて宝珠院の障りもあるべ歡び那其中に留められいたるく。那里の口状綽の容子と箇様々々と報知しく。住持の回翰を遮與しかれば縫殿は受とるもの見て心安しとなるその甲夜の間に奴婢農僕を送るく奥へ召聚へて潛かに示さる。這達情を告ぐる欲今番姫上京師へ。徒々の事あるべ。駭されさるべし。折我所天も亦その途あるべ。命果敢なくなりけん。と曩裏は彼岸二ヶ報ずる世の風聲を吹合して疑べくもあらばれば這里へも緝捕使を向られん然がそ課ぐべくその期に及び泄達へ家に火を放て何里へとも身を躲ね各々奴婢の用よる。京師のうち三千里餘りも日毎に出て遠見をるべ。緝捕使向ふと知るるべ走選[illegible]那里の動静を覘ふ城より緝捕使を出されるべ火速の注進緊要へ送れるべ焼草を採集め准備して雑譚多言をべ各々これを腰に纏ひて期に及び立退く折れ。盤纏よせるべ東西そこ人別に金三両と銭壹貫文を含せけり。大家これをうち聞て且驚き且感る。面を照水共侶へ嗟嘆して額を寄て宣の趣を兼ねあるべ期に及び我々は煙に紛れて逃もせん。身は何里へ走るべ俱にのべやあん伴せん。と云と縫

殿に聴あれ。我身に獨せん術あり。其頭の日わに機会を。徐ろに准備と潜ぶべし。然しも謀がを言示さる。大家その意に従ふべし。心ゆとるく兵へとも這年来仕れる恩を兵へば期に先ちて。逃のびて世を困ドる。明の朝より部屋に外に出るめに割笹を撒へ送るへ各々身の覚期東西失へと。秋に色に秘事。姫松葉密々に採入れて受破とのに折焼立ん。とそ。先に准備をなどそろる。自焼の准備做果てに俱に容ち心地と。一日くと過て。不樂に限りなりけり。小程に楠式部少輔正直に居ヨの士卒共侶に姑麻姫主僕と伴ふて京師と出てこるるの一日二日と過る里に飾る錦の花散りて丹楓に未し。新樹做も高峯過て杜鵑聲喚ぶ。河内路。交り来り秋らし。二四八ヶ月八九村の荘院近くる隨に駒の足掻と早めけり。侍り一間に彼岸二へ這日も途に立出て。ちらとれ素性にぐと視れば認熟れぬ居ヨの士卒と。是姑麻姫ぐ正直に送られてかり来るに。此にかけて胸ち騒て。他に正可に京師より我方ぎるに向らて。縛捕の大将士卒に。と

此へ頻に駆怕れて。飛ぶ似くに八九の宿所へ走還り。息吻あへも。御注進々々と叫ぶ駆く奴姆農僕仲間。そあれと立騒ぐ。縫殿に奥に喚禁めて出て容子と聞糾ける。登時彼岸二額より流る汗を推拭て。膝突立る聲慌しく。さに都路に推寄来る縛捕の大将騎馬苛めく四下と拂に那隊の士卒二三百名その猛と岸に降虎の羊と趕ふ。そ。その速と野に揚る。雁鳥の雀と抓ぶに似て。當るべきもいなぎ。今いたや相距ること五六町に過ぐ。隊用意に為其頭に餘人に任用と。快々背門より落ぬ卒ん伴と仕ん。と出へ快々と。聲叫涸を氣と。縫殿に騒ぎ。衆人を那這とそ。彼るべく這期に迫る。縛を議を。死暇にあるを。我身に東面る。矮樓に登りて遠見とせん。縛捕の士卒近づく上に聲を被ぎ。その折に快火を放て。煙に紛れて後門に走るも。遅ぎよ。のべくとの。ひろも。奥に納戸に退そ。身拵と。短刀と引提て。矮樓に登ると。齊一直上る奴姆農僕に彼岸二と招ぶ

ふとくも息もいとまもあらばこそ
（いせん）
（ものもいはれぬ）
兵庫人白焼節婦可憐
（ものいひ）
見るものもいとやさるなるらむ
有像第三十七

正座

せて和主正可まうそ来る。緝捕の大勢近着さうんよ。矮樓の暗躯を守漏さず期ふ後れて捕われん快々出て復ふぞ。とふふ彼岸ニまろうて門まで出てぞ伏ふ引久へ来る聲戦き。衆位立も近つたう。緝捕使の先隊のつ右ふ出て逃ぎと頻るよ惴ふ火速の催促大家倶よ怺難て原来免れ処へ矮樓の暗躯を出るまでもう。左せよ右せん。後るる。と左右ふ立る諸慌ふふく准備の焼草へ火と投もあり先へ行の逃て往方を知ぬ。雲よ紛ふ煙い天引てよ起升る猛火の勢ひ風ふ靡て煽々たり怯る折から正直い八九の宿所へ近つく隨ふ心ともるく件の煙をうち仰ぎ瞻り驚て兵毎他をまぐ知ぬ。那荘院よ失火あり。走り取ぶて快ちち滅れ我よ績げと鐘を拍て草奪地ゆぐ走る。馬よ引添ふ先隊の雑兵非常の輿よ推携へる。鍬又捍棒を挾み逃足歩く。猛く勇る勢ひ千軍萬馬の中へも。摧て入るぞ為体を縫殿へ遥よ仕とぞ。現暇ぬ緝捕の兵猶豫せず這里へ綱入らん是まぞと。短力を引拔ぶ合る直て。念佛高く十遍許唱へ果ぐ刃火を咽喉へ禹歟と突事て。廂ふ移る猛火の中へ身と跳ら飛入りけり。嗚呼憐むべ義烈の勇男婦一旦緯の錯誤ゆ。死て功るく禍鬼ふく恨みとあるくの琴の良人も御京師ゆ迷ひ同ど死天の旅地方替れば品降る。鄙ゆ猛ふ剣刀身を捨て妻よ東の間よ栄枯得失幸不幸憂苦歓楽主従の這世那土へ別路ゆ遇ぬ歎ふを知るうもるる。姑麻る姫ふ八九の宿所よ失火ありと守ーうち驚ふ復市と作と先へ走ーて路の傍よ轎子へ歌る隨る時移るまぐ。火の鎮ると等ふけり。程よ正直い馬ふ拍れ八九荘院の門前よ騎着て。只管下知ゆ。雑兵を繰入々々火を滅されば近ふ里る荘客们も皆那這ふ走ー。水と汲かけ。柱を倒して。諸骨折て挿ーふ幸ひよて山風の烈ーくもるるーぞ。東ぬくこの焼失れてその它い過半残りふけり。既ふて緯鎮る程よ正直ふ復市と。両個の雑兵を遣て。姑麻る姫并よその身れ宅着ふ召聚合つ住ぬと。緯のうと報知

さる程に姑摩姫は縫殿が往方を問ども誰も知るものなく。東なる焼迹に煤びたる女の屍骸あり。手に短刀を抜持たるが。今も放さずといへるものありければ。驚き疑ふ姑摩姫もしも復市は母の心にかかれば小須臾時もあらず走りて其首に赴きて件の屍骸をよく見るに。焼れて真黒になりたれども疑ひなく縫殿が正直なりけり。正直これを熟視て縫殿と事ならんなと。右まれ左まれ一家見なる奴婢毎の今まで一人もかへり来ざるはおろおろとまるまうかし。快索ながらと急ぎ立る下知に導れて雑兵と倶に復市は作門を走り出て那這と部を歩獺る程に五六町西のくるわる山路に仰臥に仆れてあるを。てきくこれを見るに彼岸二は。ぎやと喚ばれて彼岸二の頭を拾げぬとあんぞ。てきく仇欲和主は京師より何の程にか還りなる。唯家の縉捕を脱れんとて家に火を放け後門より人に後れず逃れぬとあんぞ。命運なく這頭ら他那石に跌て。転輾ひて折腰骨を下陸に撲差しけん立に起れど疾を堪ず。鈍く今まで臥てありしよ引起しあぶぞと問ば復市と雑兵四五名来なければ他は駭て

復市们に彼岸二を指示して他は我方ざまの奴隷ぞ。彼岸二と喚做するの箇様箇様のなりより憶ひぞ石に跌きて這頭に在りとふすと詞せわしく報知られば大家倶に訝りて。そも所以あらん。檻は何ぞの與に京師より緝捕使の向ふとあらん。況や家に火を放て逃亡たる罪軽からず捕ふ宜しとて牽もて出て。楠殿正直を京上ん快々立ひと暴かふ身を合する足を吊抗て。八九の宿所へ将て来つ。則窂の趣を正直に報しぬ。正直驚て端近く出てあるを鞫るに。姑摩姫も驚きながら障子の陰に身を退て縁由を聴すくせ。登時彼岸二は生ながら膝折布で縛生々と招了を其趣は京師を雑盗は管領の士卒の為に痍を肩に受て既に必死と見えし折自己は辛く逃走て辛く河内へかへり来つ。姑摩姫并に雑盗の報るれしと思ふよう。雑盗の妻縫殿に報して折から京師の風聲を這頭も手も空て彼岸二が報るよりと這那吻合あへりしが。縫殿は遂に疑ひを状は這里を京師より必緝捕使を向られん。その期に及で汝達は家に火を放て逃亡よとて先焼草を準備せ

られ。却人別に盤費を賜り小可を都路へ又遊佐殿の城のくまも人を遣しとせられ。
三五百の人勢の這方へ推寄来るひしを小可逃まとてければ是必京師より向はせる縅捕使
きうんと呼ばれが走りかかりを縫殿刀祢に報ける然ば我身い矮樓に登りて見定めて
聲を破んその折に火をのせよと。短刀を提て遽しくうち登りの程より御勢の近
つきうの件の暗躡を呼ふも及ばず大家慌て那這に火を放ちて共侶ども背門
より逃し折小可い山路を石に怪し非び骨を損じて仆れて今まで沈吟に隨る陳裏
を顛末小明ありけれども縫殿い既に枉死と聞て片言ありれば正直の疑ひ解ずと側聞
せし復市と躁れてうちまく姑麻姫の數に弥倍を憂患悲泣原来那母は刀を持る亡骸
縫殿ゑんに我母ゑと思ふのと言はせんいさ詮議の果るを程は正直呵々とうち笑
ひ。ぐぐ縫殿と呼ぶ。疑心暗鬼に迷される疎忽の自滅是非は及ばずある是女流の
ゆれが深く外ロるに足ねども一家兒ゑる奴婢毎に各々盤費を受ゑ暗躡を伝ひ

火を放ち逃て縫殿を焼殺しゑるその罪孰か免る。就中彼岸ゑ疎忽ゑる姑麻姫を初
より。紐轎子に乗せられ。街衢を牽れゑ。又雑盜ゑに伴當の殺れしとゑるも我い
一切ゑ知ゑ我ゑ知ゑ奴ゑゑるに這奴が知ん該いゑ。そを云云と縫殿を生て闘せよゑ那
這人ゑ。その虚を偽て喋々ゑく。縅捕使を呼ゑ。知ゑ姑麻姫ゑ恩赦に
あそ正直が送りて返しゑ。何里縅捕使を向るゑ意ゑ這春蟲物い狐狸ゑ魅され
ゑ。唱徇りて家を焼て縫殿を殺せしその罪ゑ。輕ゑ。遊佐氏に
告知て逐電ゑる奴婢們を索出て後に那首の沙汰ゑ及ん伝と細めて措べ
と。雑兵們ゑ預ける。ゑに至て彼岸ゑ初て夢の覚ゑるごく眼を睜ゑ舌を吐て。ゑんと
ゑに鮮くゑ。ゑられが黄蘗ゑ舐りゑ。唖兒ごく獨苦ゑ身の科い今ゑ。せん方歌頭に
思合せん間ゑ。昼茶ゑに牽立られて退出ける。徒ゑ程ゑ復市い勝に我ゑ恭ゑく正
直に言ゑ方才彼岸ゑ招ゑ。そ那焼死ゑる一婦人い縫殿ゑゑ。疑ひゑ。件の縫

殿は在下が母親で候へば安葬の義を許させ給へと願ふを正直ち聞て縫殿も疎忽の罪あれば。
身敢りくれば沙汰に及ばず安葬のことは姑麻姫に告て左右をせよ我は遊佐就盛の城に赴き
對面して今番の台命管領の下知状を逓與べし候れば那里の時宜によつ拙者は明日欲
後日の此召合すんと次へ姑麻姫は奴婢毎の一人も在るべきなりしが萬事に不便なるべけれ汝達
ねもく看閑なく仕へよかしと宣捉て。いそく奥へ退りぬ。件の義を姑麻姫と宅眷に示しあへ。
さて遊佐の城へぞ赴ける是れより雑兵們は辞して京師へ還るもありあるは彼岸二成
箆に乗して皆正直に従ひければ八九の宿所に留るものは正直の妻女兒に倶して来ぬる男女の
伴當と復市を作のみなりければ復市は稍便りをゑて姑麻姫に母縫殿の枉死の趣安葬の
事件々と報知して香華院を問ひたれど主従倶に涙呑みて心の憂ひ限りなけれど側なる人の
ゆるされば迭に意衷を盡すに由なく。姑麻姫は縫殿が亡骸を宝珠院へ葬るべしとて住持に
智圓に贈る消息をさへ逓與されけり是れより復市は他をねて市に赴き柩を求めなどせし

程に長き日なれど暮果て。かくて小夜の深しかば次の日里人を其ひ柩を舁せ。宝珠院に送らせく
その路すがら思ふ。我身の天命かくの如き欲彷たり別れたる親を尋て来つけるに相見しも
只一日にて二親ながら皆縫の差ひ故に陽炎の命果敢なくなり給ひたるは禍鬼の所為か
はた今はた何をかいはん。奶々の自殺は婦人に罕なる大膽勇義烈が倒にその身の仇になり
たるならん倘尋常の女子ならば其は徒ありとも左に就ても右に就ても世間に幸なき身の戕身こそ
欲すべきを其へ始まり八九の宿所に留め置直にし姉へはかまはりつくんきの奴婢們と共侶に逃走る
も報し事く從方なければ迷ふを是為のよしも我父の自殺のよしも姫上に告なる折なければ
まで空く過し本意なきに。今ならなくてはあらんと思ひ難てうち歎く涙も露の玉に餘る如意
なれども如意と云宝珠院へ葬くまゐりける這里は山寺のあれば姑麻姫の身の見あやうきに八
九の宿所の焼けると。姑麻姫は京師より叔父正直に送られて昨日ぞ着けるなるのの今朝ぞち
聞くのぞ知りける智圓禅尼は姑麻姫の消息によりて其意をゑて躬て復市に客殿にて

入れて對面あり登時復市ハ智圓禪尼ハ對して僕ハ隅屋小一郎維盈が獨子ぞ復市安次と喚做めゝゆる及せめり狹小の時故あり他郷ハ赴くを不成長りて徒而
ハ多日這地ハ來るまその折母の憑ハ儘して京師ハ赴き父維盈ハ對面の望を遂たれ
ども幾日もあらで維盈猛可ハ身故りけり哀傷の涙を袖ハ裏まで姑麿姫上ハ俱ー
なり再這地ハかゝり來る日母ハ猛火の為ハ焼れて亦復怙を失ひ不幸と查ーぬか
即便母の亡骸ハ御寺の土ハ葬まく欲ぞ我情願のまゝぞ主君の指揮まゝ是
ものうも消息ハ載られてやいん宜く憑ぞ
苦ーぬるハ偶屋主とのひ縫殿刀祢まで
便るくおぞ和殿の秘傷とへばゝ姫上ハさぞる
るへもあらるて結ぶ讀經の准備ハ程あらん柩を本堂ハ登りて姑且休息ぞ私
と叮寧ハ慰めるぞ信ぞ折ぞ一個の女子の基箇の方ハ出て復市ハ茶を薦る況

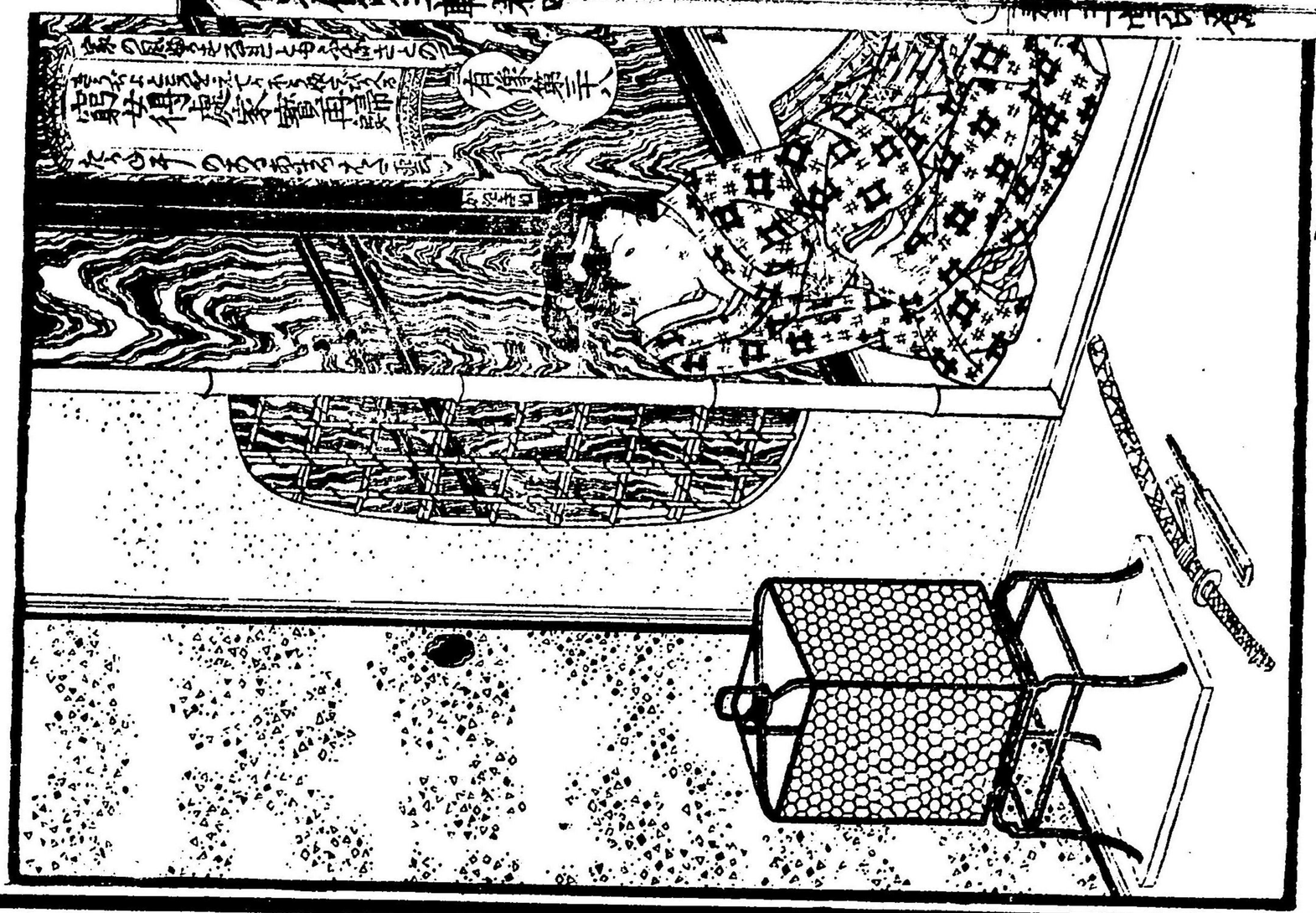
とえれば是別人ぞ復市ハ相伴ハ來て八九の宿所ハ留め置るぞ垣衣をあれば復
市ハ呆るまで胆を潰ぞ左見右見て怪ぞ人の往方ぞ知ぞ昨燬を避んと宿所の
奴婢ハ共侶ハ去向も知ぞるよと出ぞるよ
ぞ對面ぞ所以ぞあり甚麼ぞと問ぞ智圓尼推禁めぞ訝りあるハ這女中ハ多日あん
ぞの母大人ハ消息ぞおぞの折使の口狀ぞ是ハ他郷の客ぞ結れぞ縫刺ぞ行
伴人のかゝ來るまで權且御寺ハ留め置て甲まれぞ使せぞと他事ぞ憑れられぞ
俄這里ハ留めるまでハ昨失火の折ぞ煙のぞ這垣衣ハ最痛縫殿刀祢の
うへとのぞ左ぞん居あんぞ起て居て苦ぞれかと男ハ医ぞ女僧院ぞ誰と遣
人ぞるければ共侶ハ氣を問るのぞ結れば這個垣衣ハ自焼のるハ干ぞ然ると訝ぞ
へば亦垣衣ハ涙吐む瞼を拭ひて郷ハ出ぞ身の娘々君の苟且ぞ故ぞ情奴家を御寺へ
憑ぞ折ぞ敗ぞ一衣箱の衣ハ身ハ京ぞ還ぞ折ぞ預け主

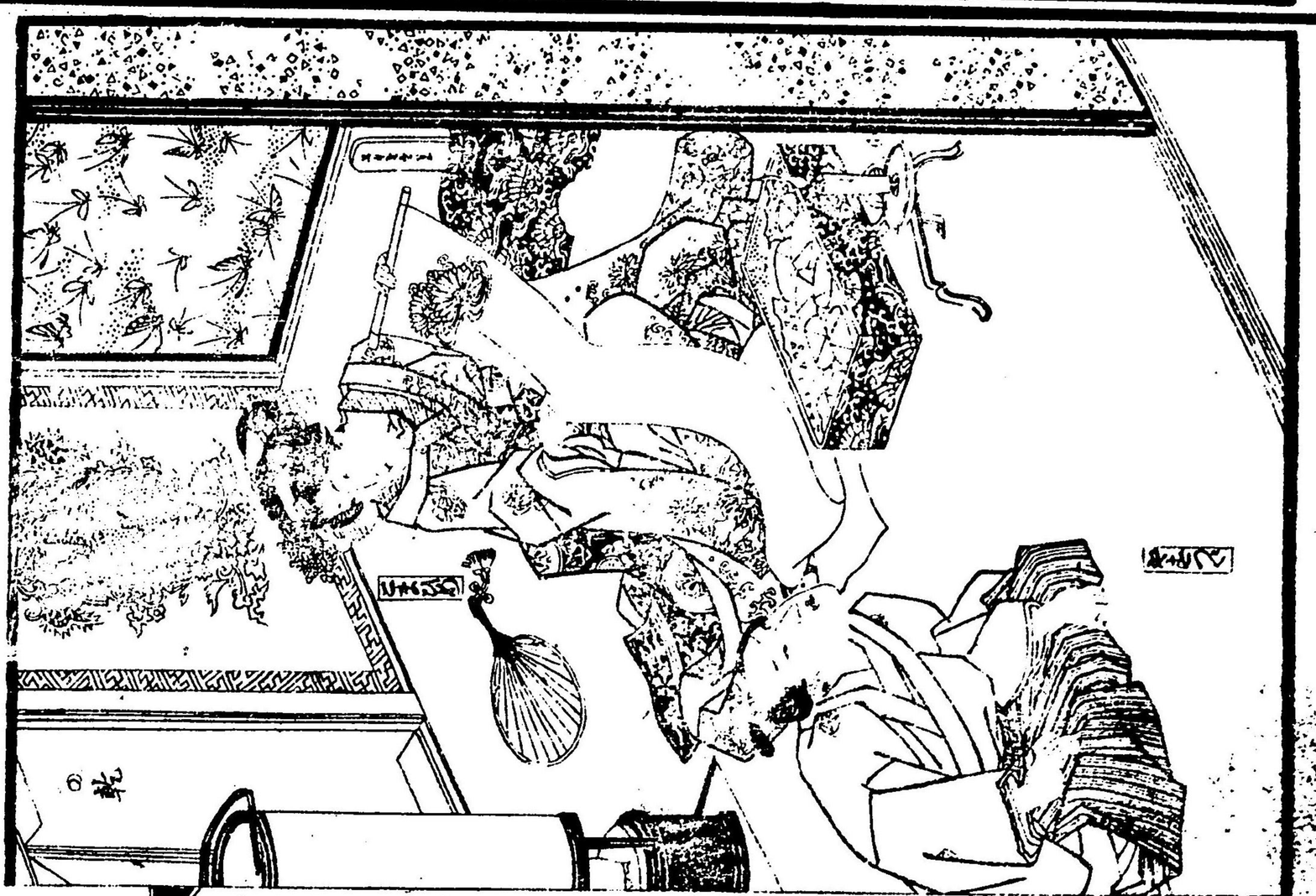
ひ給ひ匣も這里に伝るか。情由は巨細に知りぬ。今は紀に帰るべし。あら別れ哀しけれ。と泣沈めば復市も堪留難く。眼水を禁じと閉瞼りて肚裏に思やう。原来奶々は自焼の覚期に赴く少女と這女僧院へ頼こと云こと堅要なる匣を預げ給ひ。その夕べ垣衣も火に焼れぬ。迷ひ出て往方も知ざるなれば。我身を今まで大々恩義理ある女子なるを親中に告ざるに怠まで敦く計られる我親なれば這に志を微妙け我は不及々々と徳義を感ず。今ぞ迷惑さに弥増せども人に告ぶこと云ねば貌と更め恭しく。智圓尼に対ひて。僕は昨姫上に倶して這地に還るべし。我母ぶ這妙を御寺に預げまゐらせる。云も知ぬ恥に過言と允さるべきか。就て宿所の奴婢毎は昨送る逐電をされば姫上の辟近く使ひ為いぶ自由の至りに及べども垣衣を返し給べ。宿所に倶して欲ぶ這義を願ひ奉る。他事なくふと智圓尼に听ら屋女點頭てそこらと易に為ぬ。あら宿所は半分焼てその它は悉る一と欲ぶ其頭の修復果るまで姫上は又我寺に在ましけるに先住の建られる。離根亭も伝るべしと云間に本堂に衆徒と聚る鐘の声鏑々と響く。智圓禅尼は遽しく辞して方丈に退去る。法衣を更めて本堂に出て赤焼れば徒弟の比丘尼六七口。木魚を鳴らし羅列れて経を誦と平晌計復市は初より獨施主席に在り。就て香果を母親縫殿の亡骸は正元夫婦の墓の側に推降て葬りける。既して復市は住持并に比丘尼達に別を告徳を稱て垣衣を促せる。垣衣は逸早く身装して出てゐる。往日縫殿が預げたる匣を智圓尼に請ひて出る。復市は遮與りける登時復市は垣衣が衣箱その它は東西に央奴に分ち馳して垣衣に別て分る去程に真実なる比丘尼幾名欲出て垣衣を労る。齊一立て目送りける是より程歴て復市は身の暇ある折に姑麿姫に意表を告て正元の葬所をたづぬ。悄々地に京に赴て正元并に父維縫の枯骨を出て壺に斂め土中に両刀をも還りて倶に宝珠院に改葬ける。父母忠孝あれば子も亦如の如忠孝ある。夫鳳凰の卵なるべし。雛必ず鳳凰と王樹の花さくその実も玉と藍より出て藍よりも青かるべし。復市欲と是後に話

第二十八回　山上の千里鏡　克荘院を闕ふ　佛前の本命録　初て病妹を知る

却説石倉復市ハ垣衣と招てその黄昏ハ九れ荘院ふかく来て。とられば内外の人ヨタ〳〵ぶ。
ひと詳〳〵く思ひて。躰てる他を嗅近着て。這頭のるを。驚ふる作答て然べと。正直あハ遊
佐殿の城内ふ宿所わ。權旦其首ふ住のへべと。奥方并ふ息女さへ召合〳〵ぬ。高平ふ
時候でいふ。ほれば我姫上の萬支ふ便るわるべ〳〵と。老る伴當両三名を留めて這里へ帰ら
まこと。とふふ復市點頭て又垣衣と伴ふ。そぶ俗奥へ找を入る果と。姑麿姫ハ身邊ゆハ
絶て人氣のるろ〳〵ぶ且垣衣と次の間ふ留めて獨姑麿姫の身邊ふ赴ハ額を。恐れ
るぐ〳〵畏ふ人。僕不慮ふ故郷ふ帰らて京ふ。もちろん伴住〳〵則親の送訓ふ。是切とあ
とるぐ〳〵是義ふ京師と。ふ〳〵。今朝まで。兄側ふ人ヨタれば親のう我〳〵さへふ徒〳〵と生ける
折るろ〳〵ぶ。さて詳〳〵く思食ハ。昨日仰を承る如く。母縫殿ぶ古殿と。宝珠院へ葬まく。

目合ふ。未ふければ正直主のわ。老ふの皆遊佐殿の城内へ迎合ふ。初て義知住。這
折をと乃者の意表と。盡〳〵ぬ。とふふそ大胆る。身ふ二親の忌服あれども異変慮
外の折ハ。喪ふ。孝ふ。麻衣の淺ふ。世と争何ハ。許さ。ぬ。疑ふを解
く。孩と。姑麿姫ふ。聞て。我望む所ハ叔父君の伴當の送ハ。二人ハ二人ハ
ぶ。這里ハ遠る。京師ハ。雑多ふ在〳〵ぶ。心ハ〳〵ぶ。那彼岸ふ招て
世。ふ。人と。ふ。窃聞ふ。惜ども。悔ども。返ハ。縫殿ふ。倡
差〳〵人言の仇と。做〳〵ぶ。雄〳〵ふ。慌て自殺ハ。霜夜の炭と。憑〳〵ぶ。
臣節婦と。喪ハ。不幸ハ。你の。為ふ。我身の為ふ。一大不幸。面目ふ。縫殿ふ。導
豫知ふ。你ふ。ふ。未〳〵ぶ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。親の忠義ふ。ふ。嗣ふ。誠ふ。猜ふ。情
由と詳ふ。知ハ。靴を。隔て。癖と。撞ふ。心地ふ。本意ふ。ふ。快ふ。告ふ。甚麼ふ。と。問
れて復市。愀然ふ。貌と。改め。聲と。密ふ。ふ。父維盈ふ。京師ふ。管領。白山満家の士卒の





為ふ深痍を負ふて竟ふ自殺ふ及ぶる首とへべ徒々と尾ふ又箇様々々とその折の送言まぐ報知まるとも半晌許又ふ可ぐ西ろろ行く故郷へかへり来ふけるへ徒る情由をそれとて養家も飽れ綜の趣後の養母の携子なる二郎ょ家と嗣せんと呉ふ折ろ出役の途を必死の大阪あり上を辛く免れて浪華ふ来るけ。這時影と躯さぐへ退糸の折あるべくぐと呉ふ一個の行伴あり池ふ女子でいへ捨るふ忍ぐ相俱して遂ふ故郷へかへり来ろ。絶て久ふ母親ふ再會の本意を遂ふれども父惟盈ふ姫上の高野詣ふ俱して未だ還らぐと伝ふるその折母の推量ふ姫上皇城を亦内さんと京へ赴ふ。忠誠勇猛の夜夢と思ふ。心かかるよりなれば京師へ赴ふて訪へ行伴ふ女子とぐ伝八九の宿所ふ留めて。他と安内ふ隷られたれば暁ふ出夜と宿る。路次と呉ふ管理ぐ京師ふ到りふ姫上獄舎ふ繋れあり風聲詳ふ伝へ。ぐろ驚ろ那這と獨徘徊せ程ふ父維盈ぐ満家ふ士卒ふ條持媒鳥ふ捕綢られ遠笠前ふ射られて既ふ深痍と肩ふ折料ぐ其首ふ赴ふて。豫修煉ふ磯と飛と。

仇と矢庭ふ轂る退け。既ふ仆れ維盈と肩ふ引掛け走去ろ。日の圖の頭る観音堂ふ親るようも子ろ。ーよりも迭ふ名告ろ名告られて會と別れの日暮迫外ふ降ふ驟雨と袖ふ湛ー行涼るぐらかーと覚悟の父の思ふ旋ふ後ふ事只姫上の御先途と看なれと叮嚀ふ送ーる忠誠勇猛禁るを聞ぐ大奮激とみぐるる別れふ父ぐ枉死ふ満家ふの捆轎ふ秘計を。姫上の支當黨あるべ捆捕んと欲ろせと知るよりもるく無せられて。綜皆面餅ふ成ふ後悔の外ふ。那彼岸ふ招ふ紗轎子ふ。正直主ふ知ざる狡猾鬼とふられろ。這一條を満家主の秘策なれば後々まで情由と知るの罪ふ。倩て當晩小可ふ父維盈ぐ嘉城。観音堂の頭ふ座て又沿中ふ赴ふ。姫上駕るれ日ふ拯ふ克ぐべ一人とも仇を殺る。冥土の死伴ぐ。那這の風聲と探ふ赦ふ遇ふ綜の趣を申明牌ふ寫されて。伴當ぐ正直主の第へ参るべーと徇示さる事分明ぐ疑べ。忽地意表ふ出て親ふ代りる他を。正直主ふ見参る。姫上歸郷の伴ふ立ふ。

介る郷間に僕が。這里に留め置くぞ。女子の往方知れざりければ。自燒の折る婢妾們と。倶に迷ひ出づるけん。と推量るに。他に為る目よろ。宝珠院に在りけ料ども對面して。縁由を聞れに。いまる日に我母が。恁々とのに誘へ那里へ遣ーるけるに。その折小可が。ありまだ。豆取重ねる。一箇の重。件の女子に預け遣ー。這宅衣裳調度るどもに。事の情を猜ちるに。母縫殿に。只管に彼庄二が似而非注進と。世の風聲に惑されて。姫上も維盈も。京へ奪れ。ねと。縛捕使向ひ。自燒て死んぞと既に覚期を。折小可が行件る女子に。を取けんそ。綽云云と誘へて那女僧院へ隊る。遣ーるに疑ひる。件の女子の名を垣衣と。呼做るめに。故郷に伊勢る。某の里に由緒ある武士の女児れも。過世て小可と。躬陀を倶に。這地に。伶行ひ来けれど。有駄糸に揮も。棄るかに。折る宿所の婢妾毎の一人も在ざりしに。智圓禪尼に請禀ーと。そが俱ーて。かの来れり。先那重と。御覧に入れんと。後方へ。宝珠院に。ありて来る。重と。合て恭く。姑麻る姫に。ぞまるくけ。小程に姑麻る姫に。聞くと毎に。後悔の額を病ー。嗟嘆。命果敢るくなり亡せーに。皆是我身の越度ぞ。師の誡を守らぬ。出示と知れば罪まる。必ず倍る夫婦の心烈。その甲斐なに似れども。仏より遠離る。その獨子る復市が料。故郷へかの来て。親の忠義を接ぐとは。是花謝ーと実と結ぶ。世の天縁最憐ー。然れど縫殿が送ーたる。重に必要あるべ。何ぞあんとよかー。とに復市ぞ。重ーに引る。重封皮せー。韓組紛と。鮮返ー又元返ー。開けば内に正元夫婦の木主。并に菊水の旗。這宅を金銀ぞ。くあり。只一枚る。目録の左編に。金のヨヌ寡と。寫ーと。ん木主に祠堂へ納む。ん旗に什物と。秘措るべのと。短く送る。筆の迹勢に。宛決然る。男優の女文字。を子に為に。一行だ。に。今般の忠心義胆に。深く感る。主従に。憶ぞ面と。昭火ー。感涙の外るけり。且ーと。姑麻る姫に。木主と旗と。合る抗て。額に。駄ーて。念ーて。重に。藏め。瞼を拭ひて。喃復市。駄れかけり。思れる。我身なりに。差もく。縫殿が。今般に。選佛場へ。秘さんとせー。家の重宝の。ぞくも。我

て
なほ還らぬ凶中の吉禍中の福ひ火も焼れぬ人も渡さぬ倚伏ハ糾ふ纏ふ似ら定めな
世の起住ひ神ぞ知ぬやとのふ復市慰難く且倶ふ惆然ら登時姑麻ゐ姫ハ果
まるぬ死ふ甲夜過ぬらんと思へ四下とろろ今やよ復市你ぶ倶ゝと来ら今ゝ垣衣と欲ふ女子ら
甚麻ゐ姫ぞ来ぬ思へとられて復市心ゝて寔ふその義もひ絶這那と禀ゝとのヨゝ来ければら紛
見参遅滞ふ及びら先より他ぞ乱次の間ふ待ら〜れぬ不乖けんでくとひぬ〜遽く
身と起ゝて垣衣ぞ這方へと喚立ら會釋とされば垣衣ハ阿と応て找入ら見参ふ當下姑
麻ゐ姫ハ燈の下より垣衣と熟視るふ二八ばかりの女子ゝ容貌の艶麗る舉動も鄙ぬ
現復市ぶハるふ差ぬ由緒ある武士の女児ふてそと思へば近く招ゝよせて初て遇ひ憂ゝ
漏れぬ我身と摘て艱難さゝと想像る和女郎ぬ故郷ハ伊勢ら〜ぬ復市ふ由縁ある人と
哀ぶ初見参より最憑ゝ心地ぬる奴婢ふ医ゝた折るれぬ使ふとヨゝ〜ゐの義とられる玉
ひてよと最懇る言の葉と掬頭の花と垣衣ハ感涙坐ふ額ゝて世ふ有ゝた御懇命まらもら

面るゝとゝ〜ゐる星の出崇ゐ身ハ神風の伊勢路より流れぬゝの河内ふ相識もゐ〜ぬ
ゐる〜ゝと憐ませゐる〜薪水の事でも厭ねど鄙の田舎ふ生育て心ゝたるゝとのとるゝとゝ〜ぬ
させゐひかとふと姑麻ゐ姫ゐ人ぬ不古物々ぬゝ主ハ伯〜ぬ這里ぬ田舎の僑居ハ富ふて
礼節と知るゝハ宿ゐ人ふ隔ゐて面ぬ届ゐぬ復市ハ三世の譜第我身の與ふハ俗ふ
乳兄弟ぬ伯ら〜萬吉文ハ憑むゐれども有穀ふ男女の差別ゐ身邊親く使んとゐ
你ふ優ぬことゐ〜やとゝ憑ハく示さる垣衣欲ど且感服ゝて是より側と離ることゐ萬事正
首ふ仕ハ〜ゐ姑麻ゐ姫ぬ欲び夜ハ臥房と倶ふまるぬ聊ぬ不意せぬ獨心ふ思ゐら垣衣ゐ才
長て旦心ざゐぬ虚華ゐ〜ぬ他ハ必復市ぶ結髪の妻ゐて倶ふ故郷と走ら〜ゐん今ハ復
市ぶ二親の忌服ゐ他ぬハ謹慎む時ゐふその情縁のことぬ質問ハるば聊ら〜ん一稔
ぬて復市ぶ親の服の関〜折我身必媒妁ゝと夫婦ゐるぬ〜ゐ尋思せ〜程忽
地ふ悟ゐら〜ゐ量義ふ我師の別れふ莅ゝて示さゐひ〜五四の句ふ垣衣黏石麗盈復ゝ

則今の為にて。垣衣は是かれ去る之他は石倉復市を伴れて来ふれば石ふ粘といふ所の維盈夫婦は禍鬼ふ身を殺せとのへども其の子復市安次が不思議ふ伊勢より帰来る我身復安ふ帰ふと四言二句ふ盡されて盈を虧と維盈夫婦の虧るめるを復安が帰村ふ其の子を見るに偶然ふ帰ふ来ぎ又前二句の遇一必破とある一は一休さんと既ふ是分明へ只會六有歓と示されるのみ今も為ふ其合ふるとなれども我仙嬢の神機妙算後ふ必悟るとあん然ども我は京師ふ敵一人も殺さぬぞと身ふ縲絏の辱を受て股肱の隅屋夫婦を喪ひ為ふ違教の科へ縦奇術は破れども又剣侠の技を要せぎ今より女侠ふ為ふ一まつ独心ふ折言ふ深念の腑を固めけり。恁而有一日姑麻姫は復市ふ事吟味する語次ふ你は既ふ親家を去て実父の迹を嗣ふ為ふ石倉と名乗ふ要者。隅屋復一郎安次とふ姓名は御京師ふ在り一折三管領も知れふ為ふ伊勢へ憚るとも他の姓を冒さんより隅屋と名告ふ相応しかるべの義ふ心屈ぎる欲とのれて復市何とぞふ為て小雲妻時は心を為せぎ。

くふ〜て答る為う。仰寔まその理あり。小可も亦件の義を思ひ出るふ為ども。爭何せ石倉氏ふ亨る養育の恩一朝の為ふ捨て。縦親父母の欲せるまふ義弟ふ家叔を譲らん與ふ伊勢へ還ぎ為ふ故ども。辞別ふ及び切て養家ふ氏を冒し。徳と忘れ故志と表さんとふ岩しあるども宜ふ去れば是も亦耳を塞ぎて鈴を盗むとふ常言も似るべ。仰ふ為て僕ら今より本姓ふ立復るべ。後ふ至て幸ひふ児子二人も生るば一人は必石倉氏と冒らし本来ふ志と全うせんとの義と許さぎのよか。とふふ姑麻姫感嘆し。現安次が老実る一椀の糧一夜の宿も報ふ義一ふ義士の志況年来類育せられ。報恩然しそと感嘆し却荘院と修復ぎ并ふ奴婢農僕と新ふ養へ。そと村長ふ商量ぎ。他ふ通て我父祖の徳と忘れ故ふ為れば財市助ふるとあるべ。そ又這一義と談せる。費用は皇義ふ室町の営中ふ小倉院より賜ふ故と渡れ千金あり。然でも縫殿が貯る財用あ医ふ為ふ小雲妻時も猶豫ぎとふふ復市あるべ。次の日村長と故老們ふ件のよと告知し。綜の便宜と徴ふ約莫當國の農戸商賈ま

皆正成の送德を莫大とぞ。今番姑麻姫ぞ京師へ復讐の為体の緯
を発覚れて宿望を遂ぎとへども愉快なるのヨヌクーと語り接待て憑心く少折れば件の
ようを相譚れて更に憚る色もなく鄰郷まで打ち聚合て商量速に整えられば男女の児孫多か
ほのに相応の名迭に擇て各々八九の荘院遣し或は奴婢と做し農僕なれば姑麻姫に仕
るのの初よりヨヌクーなりなりて鄉高に正直より隷られる老伴當三五名の東西と食せ労しく
主に返し遣しけり。偖て又村人の山あるのの木を伐出し負しのの夫役を出て力を戮して荘院を焼
たる処を修復せしが家も亦初より最寄麗なりしれども姑麻姫は岩しより銭財を費
さで落成速なりければ是祖先の恩德と村長并に村人の侠氣致所とそその間日毎
日毎に飯いけらえ酒と餽りそと叮寧に労られば感歎して粉骨と盡さるのなりけり。然れば又補
正直の家宅の地所を這那と口の管に擇さん。姑麻姫の宿所より六七町東の々に山川ある処を
占て孤山と内の細小川と前にして家と造るに招き応ぜる番匠們罕也作支遅滞に及びぬる

秋に至りて漸く程徙をとけるに憶ぞ病鬼に出逢れて苦心ぐるもあぐりけり。其頭の角
原に正直に一個の苗児あり。名と苫子と呼ぶ姑麻姫と同夷の遮黄標
致に二の町也。額廣く頬肥腮て嬉般木茶に似るべられば花の傍る深山樹なりて日と同じ邛
氏と論ぶべもあぐるに這秋痘瘡と患けるに怕るべき難痘也。醫師は匙を捐て召べとも来ぎ。
験者は壇と降りて效なりとぶめりの故に正直夫婦は憂悶して寝食と安くせぎ。ぶに苫子と
ち譚に這に程遠なる如意宝珠院とに安僧道場る。本尊地蔵大菩薩は人の病
疫に利益あり。特に婦女子の難病平愈と禱るに応験あぐるとる。住持の尼苗に祈禱城
憑と護符と与へのべやと薦るめるれば正直這誠を信容てその日妻の木石と宝珠
院遣けり。小程に正直の渾家木石は伴當幾名扶従て轎子と飛しつ宝珠院へ赴て。
地蔵菩薩と拜こなる。住持智圓尼に對面して女児の病瘡と生げ。祈禱を憑と苫子の
肌膚衣と生れ歳月の小録と祈禱料の金一包とまるせれば禪尼速に業りてけるに祈念を

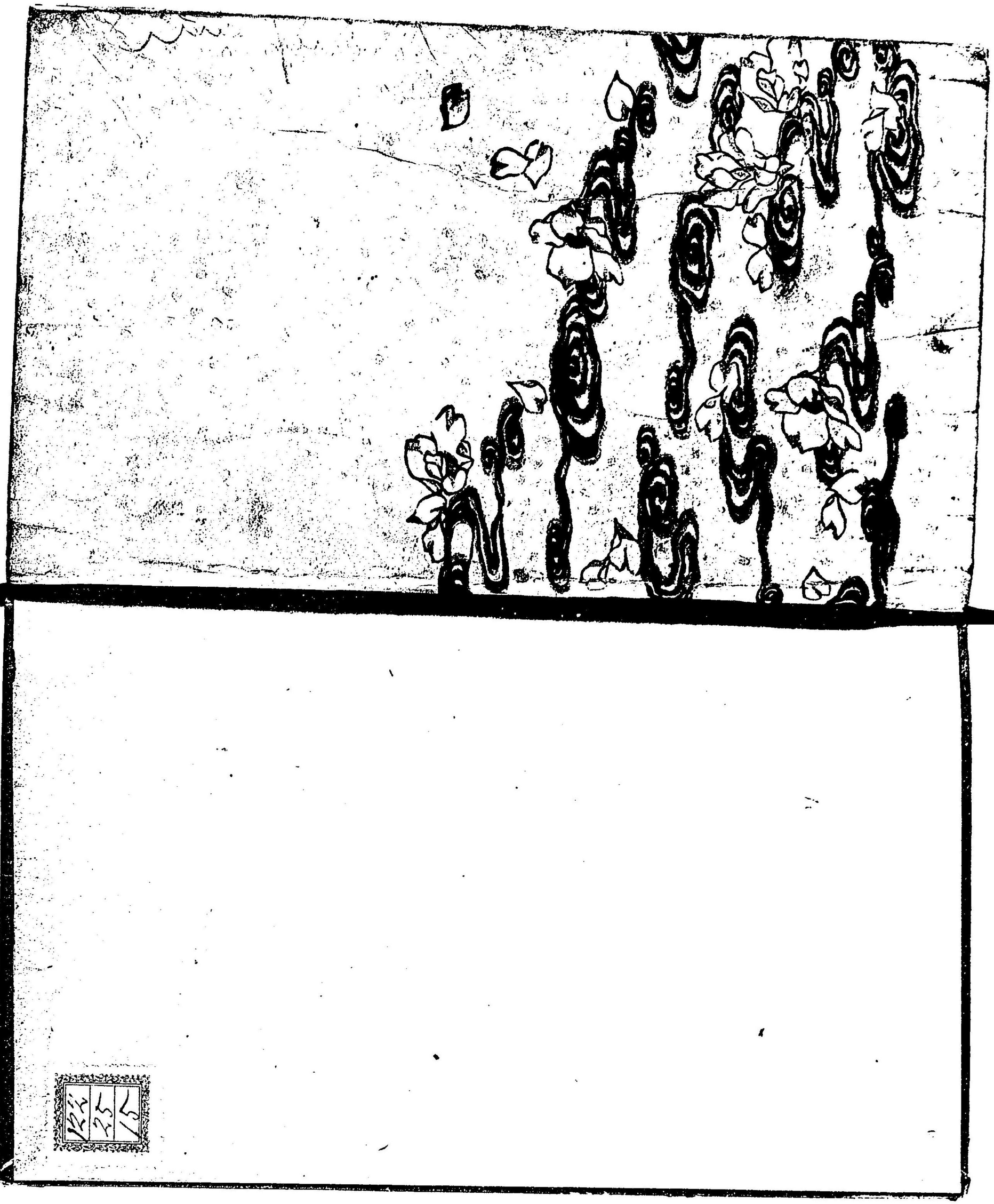
あるはたらそいふつてそ達慶う目の
めきやうくちまうせんりがん
明鏡一望千里眼
玉のかみをちらくアんらむ

べしとて先護符を與へけり是より木石八日毎々ふ宝珠院（専使を遣して護符を請せり）
けるふ苦薩の利益恐るべきを以て日を歴ふれば苦子の難痘稍癒て既ふ結痂ふ及ぶまで
辛く命根を保留めれども痘瘢酷く送りて醜婦ふなりけり正直は是を所以として人々
八九の莊院へ赴き姑麻ゐ姫の舉動を看るとなく那首は動靜を
覘ふ詳ふ知ることなく一日みづから宅地の内なる孤山のうち登りて那辺と觀且
ふ姑麻ゐ姫の宿所の光景殘りなくなるとなく是究竟と欽び後思千里鏡にて毎ふ
那里を覘ふふ姑麻ゐ姫の折々坐席の半分まで鮮明ふ見えざるなく那辺の人々
姑麻ゐ姫を知らず便りなければ正直竊ふ欽び我みづから那里ふ赴くとも姑麻ゐ姫ふ心
解ることなく這眼鏡どのを居るべきふ那里の動靜を覘べ他が馬脚を露はさんと易
嗚呼我ながら愛しき哉と獨頻りふ自眉自賛し那里の動靜を覘ふ毎ふ遊佐の城へ消息して
昨は姑麻ゐ姫の宿所へ佳きことの聞けば又佳きと間なく時なく報ずるを然とて京師へ少しあぐべし密山

謀の筋あるふあらねば就盛は冷笑して之を労ふとなるより正直も亦勢ひ衰へ漸々ふ懈りて自親ふ又
孤山ふ登りて折々家頼ふ吟咐して其の外ふ已ぬ高間の山の雲を眺めるなりけり佳りー
程ふ姑麻ゐ姫は叔父正直が稍久しく訪も来ざるは女兒苦子の痘瘡の重かるを故なりと知るよりー絶て音信
なれども疎ふは還て得意ふ後安しとふ折々の風聲を心ともなく他ふ那彼岸ふ居る比正直は捕
捕られより遊佐就盛が沙汰として彼岸ふ共侶ふ逃亡する奴婢農僕ふ往方を渉猟り捕ふ遣
る獄舎ふ繋ぎて拷問数回ふ及びしかども他ふ悪意あるなきを以て那折縫殿の暗躍なるたで
快火を放ち逃去りしその罪同じかりしを彼岸ふ招了と異なるなけれども左右する程ふ彼岸ふ并ふ一
両個の奴隷農僕の老ふ日毎の呵責ふ勝ざりけ獄舎の内ふ身故なりければ這者と縛の本人とて
その它は背と一百板撻して追放せられしとふ姑麻ゐ姫これを憐みて那折の勢ひを思惟ふ徒に
二が疎忽なる縫殿は自焼ふ及びしかども然べきそなるを俘ふ報ずるふあらざ是言の錯誤を誰
も討ずして事なれども賤しめは智慧浅けれども漫ふ火を放て逃亡れしその罪を竟ふ免るべきを

彼岸と并びにその宅にあるも命を殞せし不便さよ明日は縫殿が満百日の卒哭忌なれば丁ど是等が與にも經を讀して菩提を吊ひなさせんと思ふなるを怪々と復市に少し知して宝珠院へ好事がましを叮寧に憑を遣し次の日に復市と奴婢二西名を率て轎子にうち乗りつ那女僧院へ詣墓参して讀經の間姑麿姫は本堂の傍なる伊豫簾を垂る内に在りつゝと見亘すに系座に掛る漆牌に丁丑年五月廿八日夜八ッ時出生の女子疱瘡難解除の祈禱七月廿九日より八月五日まで願主楠氏と白墨をもて寫したり。をゐるくて坐に在ゐ法莚果て客殿にて住持智圓尼と暗譚の折四表へ表の語次に那系塵に掛られたる漆牌のよしを問ふに智圓尼聞て微笑て彼女はまだ知し召さずや那は叔父公正直主の息女苫子小姐がありし比疱瘡にて命危かりし折尼が祈禱を憑れて本尊延命地藏菩薩に七日祈念し侍りしかば果して利益ありまして日數のごとく痊りぬれば其生年月を忘まじ與に寫しうち侍るは折々侍り今番に限る所にもあらざりしと姑麿姫稍悟りて苫子は奴家と同庚なることを豫ねて知れども誕生月と日と時は御牌によりて初て知れり那少女は今茲まで疱瘡をなさず果さで

すし秩小父の久しく乏ありしは是等の障りありけんを毫も知せられざれば我從父女弟の病着ありしを御寺へ詣てはじ初て少知るは反て復も恥しくぞ侍るなれと陪話るを智圓尼慰めて然る宜ひぞ世の鄙諺に燈臺遠て下暗しといふは是等の故にてそいへり今なる當寺の延命地藏尊へ乞て女人に御利益ありし先住智正大禪尼は稚かりし時大病にて十死一生なりけるを這里の御佛に救れて遂に本復ありしければその佛恩を報せん與に女僧になりしとぞなれば是なん身の伯毋御前なれば豫め知りぬべし現世の利生灼然なれば身後の引接勿論なりけり追薦の亡者達隅屋氏夫妻彼岸に毋孰か成佛せざるべき。深信怠りのなきと鼻春蝕めかして示さるゝ姑麿姫は恭しく應答ろへなる言果て辭別して立ち折に智圓禪尼は遽しく昨日贈られし讀経料の鉄びを餉さんと知客の女僧を先に立して玄関近く送りぬ侍て又姑麿姫は轎子にうち乗りて宿所へかへるも程なく帰らぬ約莫人の本命は生れし年月日時の支干を神にも諂佛にも告て冥福を祈るものなるに我宝珠院にて見たる苫子が本命は十幹兄弟を用ひずして月の數日の數を寫着られたり。あるかね意は八字生來とふことを知らぬにやと心に挾し宿

所ゑ還るべきの甲夜の間に惜字箱より十六年以前なる応永四年丁丑の舊暦を索出して獨燈燭の下に撿しらべるに這年五月二十八日は小暑六月の節にて即丁未の月と又二十八日は是辛未の日なり這曉八鼓は巳丑の時に當れり信れば苦子の八字生来は丁丑丁未辛未巳丑は本命なると疑ひなる。我身も同庚なれども壬子の月乙巳の日巳卯の時に生れしなれば八字の吉凶大く異なり苦子の八字を考るに丁丑丁未は比冲也是凶信れば年と月と応ずるも又年は丁丑と日の辛未とは天尅地冲亦凶但年は丑と時の丑と比肩なれば凶なるのみ女は男に愛ずるも忌るも元容貌美と醜にあるのみなるに他は素より美人にあらざれば狀と疫瘡に損れなば賣難てさぞ憂るべしと痛んとなると人を呪へば身の不祥さも十寸穂の芒色に出て秋風戦ぐ蓡に鳴く虫の音なげに殺氣あり。怪しや。今宵は事あるんと思へば人来告げず獨睡てに小夜深るまで此も由断せざりし畢竟姑麽姫に今宵の先見差ぞ又甚麽なる事なるか。元巻と更て這次に解分ると聴れかし。

開巻驚奇俠客傳第三集巻之四終